

# 神奈川支部情報

第18号 発行日 2010年6月15日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部  
<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263  
e-mail

[kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp](mailto:kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp)

郵便振込口座 00190-2-114578

5月29日に開催した、第8回神奈川証言集会はかながわ県民センターで50人が参加して盛大に開催しました。今回は、中帰連の会員ではありませんが、松本栄好（まさよし）さんに山西省での従軍体験を語っていただきました。松本さんの証言については、前号（第17号支部情報）で詳しく報告しています。

ところで、集会に参加された内田先生から下記の報告文章が発表されました。研究者からの解説で、主催者としてはたいへん恐縮しています。下記、紹介します。

## 山西省盩厔県に行った兵士の従軍体験を聞きました

横浜市の神奈川県民センターで2010年5月29日（土）に開かれた戦争体験を聞く証言集会に行ってきました。「撫順の奇蹟を受け継ぐ会・神奈川支部」主催の集いです。この会は、中国に従軍して戦場で残虐行為を犯したのち認罪して帰国した元戦犯兵士たちが作った民間団体、「中国帰還者連絡会」（中帰連）がメンバーの死去と高齢化によって解消されたのを機に結成された団体です。会場には四十人以上が集まりましたが、戦前生れの高齢者が多かったとはいえ、二三十代の若者も熱心に証言に耳を傾けていました。

この日に体験を語った方は松本栄好（まさよし）さんです。相模原市在住の方で、1922年3月30日に福岡県柳川で生まれました（88歳）。松本さんは18歳のときにキリスト教（プロテスタント）に入信した方で、軍隊に応召するまえに尊敬する牧師さんから、「この戦争は絶対に負けるぞ」と言われました。だから、「戦争に行ってもぜったいに馬鹿なまねはしないぞ」と決意していたそうです。戦後帰国してからは、福岡の西南学院神学科に入学し、卒業後は長い間牧師として伝道のお仕事をされました。人間性を抹殺しようとする苛酷な戦場を生きながらも、良心を保ちつづけた方であったように、私には思えました。松本さんは、遼寧省撫順戦犯管理所に収容された戦犯ないし戦犯容疑者ではありません。本人は中帰連メンバーではありませんが、「現在は過去のうえにある。過去を語ることは過去を生きた者の責任である」と考えて、今回従軍体験を語る決心をしたそうです。

松本さんは、1943年4月10日に福岡県久留米の第48聯隊に入隊しました。徴兵検査を第一乙種で合格し、衛生兵としての訓練を約6か月間、久留米の陸軍病

院で受けました。独立混成旅団として編成された部隊に入隊し、朝鮮半島の釜山から鉄道で天津や北京をへて1944年2月、独立混成旅団カタメ〔固〕兵団第7大隊の一員として山西省孟県県城に到着しました。第7大隊本部は県城に置かれ、松本さんは第4中隊（約350人）に所属しました。しばらく県城にいたのち、そこから北に30キロほどの距離にある上社鎮という村の分遣隊に配属されました。たたき上げの曹長を隊長とする約30人の兵士からなる分遣隊でした。上社鎮にはもともと前の部隊の中隊本部がありましたが、それまで駐屯していた部隊が転出して、今度は新たに県城にきた兵団の分遣隊が同村にやって来たのです。前の部隊は、おそらく第62師団で、この師団は1944年3月に山西省をでて河南作戦に参加し、その後同年晩秋に沖縄に派遣されました（内海愛子・石田米子・加藤修弘共編『ある日本兵の二つの戦場：近藤一の終わらない戦争』社会評論社、90～92頁。同書は、孟県の隣の遼県（現左権県）に駐屯した近藤さんによる贖罪の証言集です）。

分遣隊の任務は、周囲の農村の治安維持で、反日活動にはたえず眼を光らせていました。松本さんの分遣隊には、たまたま現地召集の兵士が一人いました。現地の中国語の分かる彼は農民の服装をして周囲の農村で偵察活動をしていました（その兵士がどのような理由で現地語ができたのかは、松本さんは知りませんでした）。彼が反日活動の容疑の村人を見つけると、分遣隊が捕縛して情報収集のために拷問をしました。ちなみに、上社鎮は加藤修弘さんの研究によると独立混成第4旅団が1939年3月9日に占拠し、以後ここにトーチカを築きました。孟県では、県西部の西煙鎮、県東部の東会里とならぶ3つの重要軍事拠点の一つで、これら3鎮には傀儡の区公所が設置されていました。上社鎮に置かれたのは第4区公所でした（加藤修弘「証言解説 大娘たちの村を襲った戦争」、石田米子・内田知行共編『黄土の村の性暴力』創土社、133、150～151頁）。

松本さんは衛生兵として従軍生活を送りました。衛生兵は、軍隊内では歩兵と比べると軽んじられていたそうですが、戦場では負傷した兵士の手術をするなど、たいへんに重要な仕事を受け持っていました。そして、慰安婦の管理や戦場における性暴力についても重要な関わりをもっていました。性病の蔓延は日本軍にとっては一大事でしたから、軍隊に附設された慰安所で慰安婦が性病に罹っているかどうかを検査したり、兵士が中国の村の女性を輪姦するさいにもあらかじめ女性が罹病しているかどうかを検査したり、兵士にコンドームを使用するように指導したりという役目を負っていました。今回も慰安婦をめぐる具体的な証言をしていただきました。松本さんによれば、当時孟県県城に駐屯する第7大隊には7人の朝鮮人慰安婦がいました。カタメ兵団は計7箇大隊から構成されていたから、兵団全体では50人前後の朝鮮人慰安婦がいただろう、と松本さんは推定し

ています（孟県県城の慰安所については、石田米子他「山西省の日本軍「慰安所」と孟県の性暴力」、前掲『黄土の村の性暴力』、244～245頁、に分析があります）。

分遣隊が駐屯する前線には慰安所はありませんでした。兵士たちが討伐と称して掠奪をするときには、拉致強姦も付きものでした。あるとき村を急襲しました。逃げ遅れた村の婦人8人を捕まえ分遣隊の駐屯地に拉致しました。まず衛生兵の松本さんが婦人の性病検査をしたのちに兵士たちが輪姦しました。1週間拘留して輪姦したのちに彼女たちを釈放しました。松本さんによれば、分遣隊による拉致はこの1回だけでしたが、婦人たちを帰したのちに、分遣隊は村長に女性の供出を要求しました。釈放と供出がどのような関係であったのかは、よく分かりません。釈放するさいに分遣隊が新たな供出を要求したのか、釈放を交換条件に村長が供出をもちかけたのか、は不明です。釈放後、2人の中国人女性が分遣隊に送られて来ました。松本さんの記憶では、2人の女性は「娼婦上がりの人」でした。

しかし、村長が2人の女性を選抜した事情や経緯は不詳です。村の一般女性が被害に遭ったあとで、彼女たちよりもさらに虐げられていた女性たちが日本兵の人身御供として分遣隊の「強姦所」に送り込まれたのです。その後は、兵士たちが彼女たちにお金を渡したそうです。しかし、彼女たちが貧しい身寄りのない女性であったのは明白な事実ですから、中国の村で発生した性暴力は、重層的な差別の構造とリンクしていたのです。あるいは、「偶発的」な性暴力の発生が恒常的な「強姦所」を作るきっかけになったのです。これは松本さんではなくて、私自身の解釈です。上社鎮は1939年以来日本軍の軍事拠点でしたから、松本さんの所属した分遣隊以前にも性暴力が頻発したことが推測されます。

松本さんは上社鎮の分遣隊で1945年8月15日の敗戦を迎えました。敗戦から10日も経って敗戦の報を突然知らされました。敗戦時には2人の女性のことを配慮する余裕などなくて、彼女たちを置き去りにして撤退しました。分遣隊は八路軍の追撃を恐れながら、山の稜線伝いに省都・太原に撤退したそうです（じつは、対日戦勝後ただちに晋察冀辺区晋東北区第2分区の八路軍部隊は上社鎮を含む孟県の日本軍拠点への回収作戦に着手したのです。内田知行「山西省孟県における日本軍占領統治と抗日運動」、前掲『黄土の村の性暴力』、397頁を参照のこと）。戦後山西省に駐屯する日本軍は、同省の支配者閻錫山の軍隊から残留を要請されました。しかし、大牟田の三井鉱山に籍が残っていた松本さんは、1946年3月に無事帰国して職場復帰しました。

証言のあとで私は若干の質問をしました。第一は、性暴力の被害を受けた中国の女性たちで出産した人はいたか、という疑問です。松本さんの知っている範囲では、一人もいなかった、みんな避妊具を着用させていたから、という回答でし

た。じつは私は、中国の戦場でも性暴力の結果、望まれない出産が発生し、多くの墮胎や子殺しがあったと推測しているので、この質問をしてみました。

第二は、分遣隊にはコンドームは充分にあったのかという疑問です。敗戦間近の1944年には分遣隊への物資補給に困難が生じていたのではないか、と思ったからです。しかし、松本さんによれば、分遣隊には十分な数のコンドームがあったそうです。性病の蔓延を恐れた日本軍は、何はなくともコンドームの配備には努力したということでしょうか。

第三は、当時の上社鎮の占領支配の状況について、です。村には「保安隊」という中国人の武装組織があって、「虎の威を借る狐」よろしく日本兵といっしょに掠奪をやっていたそうです。松本さんからは村の傀儡政府について聞くことはできませんでしたが、女性の供出に応じた村長がいたことから、依然として1939年当時と変わりなく傀儡政府があったことが知られます。

(2010年6月／内田知行)

## 内田知行さんについて

現在 大東文化大学大学院アジア地域研究科教授 [学部と兼任]

日中教育研究交流会議員

### I. 単書

- 『黄土の大地1937～1945 山西省占領地の社会経済史』  
創土社、2005年2月 総頁数310頁  
要旨 山西省日本軍占領統治体制の概況を素描したのち、山西省抗日政権の財政収入と製鉄・運輸／山西省傀儡政権の財政的基盤／山西省傀儡政権のアヘン管理政策／山西省傀儡政権下の製鉄事業／山西省傀儡政権下の鉄道事業、を分析した。
- 『抗日戦争と民衆運動』  
創土社、2002年2月 総頁数343頁  
要旨 抗日期の民衆運動の概況を素描したのち、抗日根拠地における農業生産互助運動／義倉運動／アヘン吸食者救済運動／対日協力者の摘発運動、国民党地域における日本人の反戦運動／朝鮮人の抗日独立運動、日本占領地域における日中民間交流活動の実践、を分析した。
- 他

その他、共著多数